

始



産土家の縁

相物の巻



小田氣軸揃



小田氣の遺跡に

振出し懸川藩領の掛合に

大八岩丸の脈法に

其書に二宮重頼の

師に引一引忠義一引

聖人より了無様

是等の念心馬を



小田原神社



小田原の舊城趾に

社あり徳川幕府の柱石たりし

大久保氏の祖先を祀る

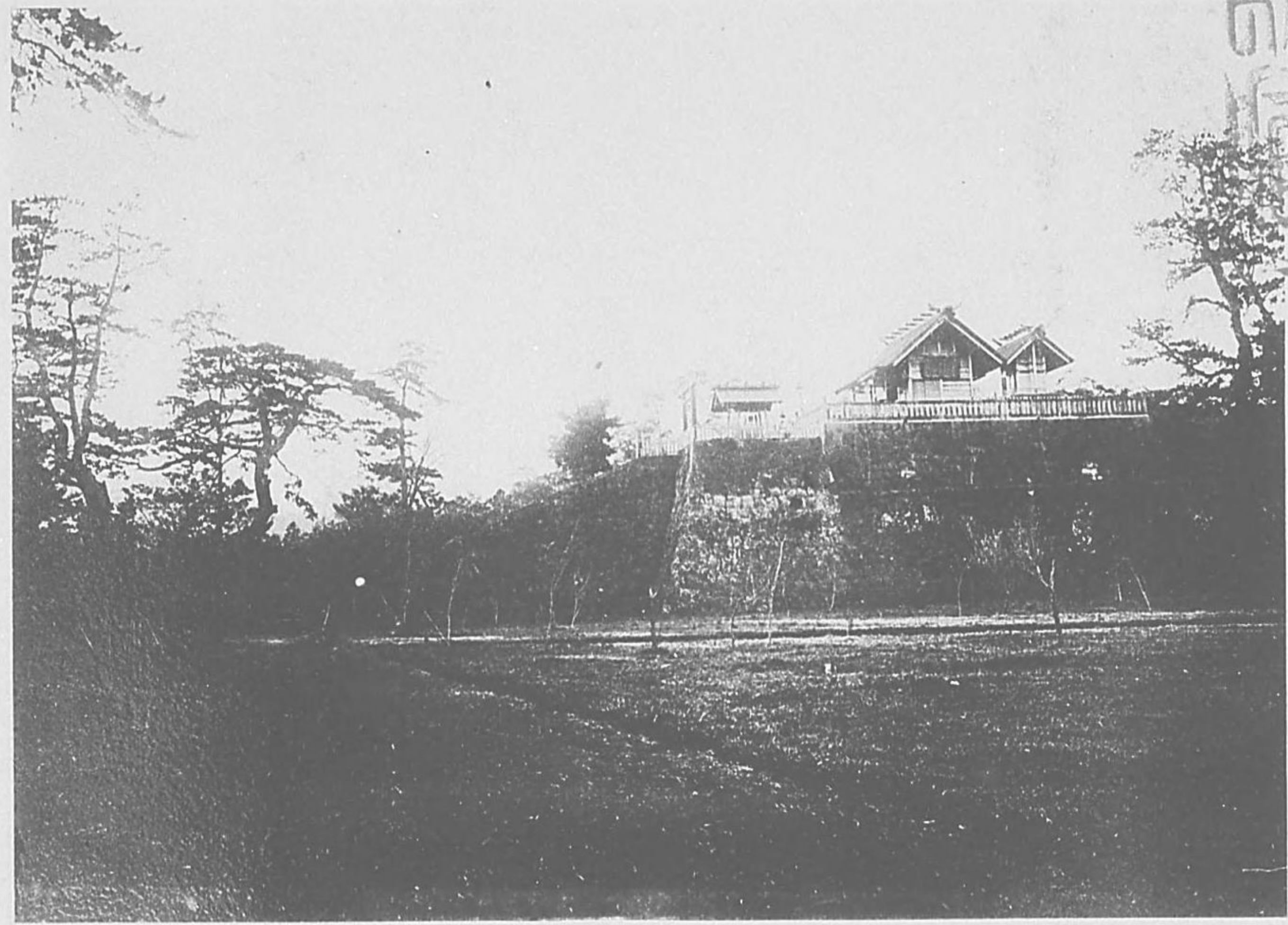
其傍に二宮尊徳翁の

祠あり一は忠勇一は

厚慈人なして欣慕

泉墓の念を起さしむ

小田原神社



大磯海岸

めざし満らすなと詠みし昔は知
らす今は海水浴場の繁華となり
てこゆるぎのいそぐ旅人も此所
に立よりにて勢れをゆるめ避暑の
頃は殊に群集すまた小龜ならぬ
小舟に打乗り磯の波分け沖に出
で、夕月を賞するも多かるべし



鳴立澤西行菴

心なき身にも

あはれは知られけり

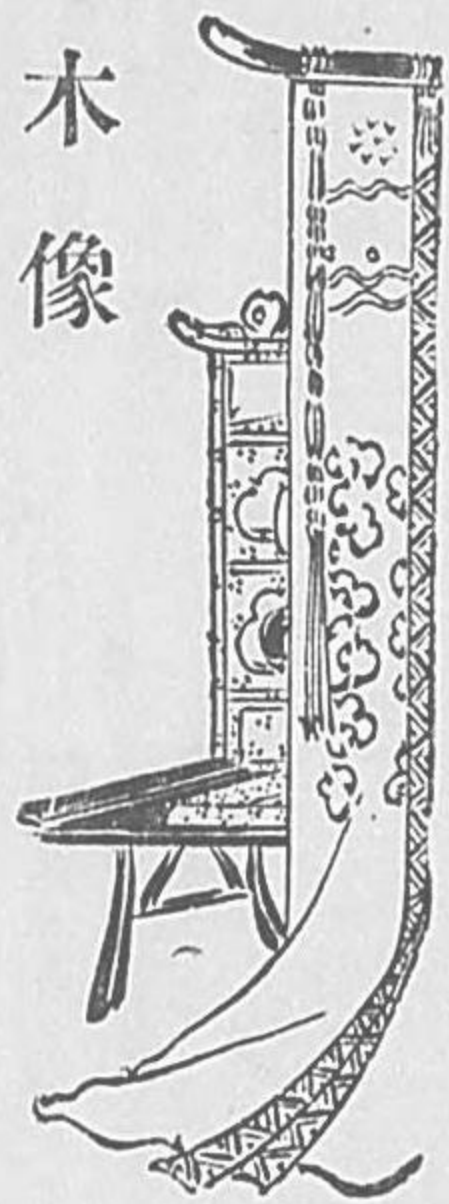
鳴立つ澤の秋のゆふぐれ



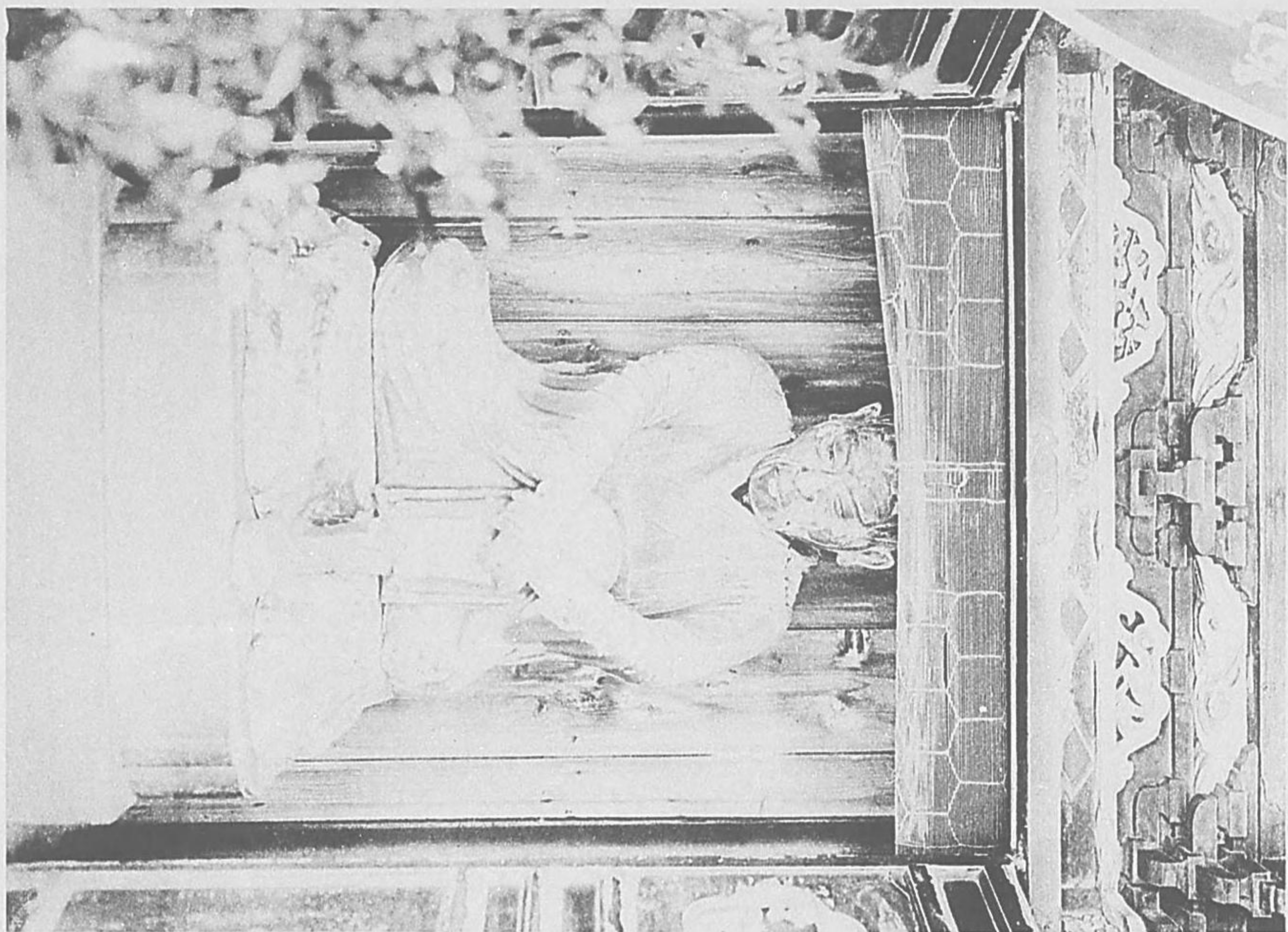
いさこゝろあるさまなる詠を五條
三位が運びもらし、は千載の一失
ならんか



西行菴木像



源二位に弓矢の話したるほどは
敷島の道を暫しいづこにか置き
けん、賜はりし銀の猫を門前の童
にくれたる心を推せば鎌倉の富
貴も眼になき如し、たゞ観る所は
風と月とのみならん





片瀬海岸

宗尊親王が

歸り来て又見んこもかた瀬川
にこれる水のすまね世なれば

この述懐、將軍の窮屈なりし當
時を想ふべし今は自由の民と
て川ばかりか此海岸のけしき
を再度三四心任せに賞し得ら
るゝも澄める御代の賜ぞかし





三崎燈臺

海面常に闇夜なくいつも月光あり
加れかへす

燈のきらめきや初松魚

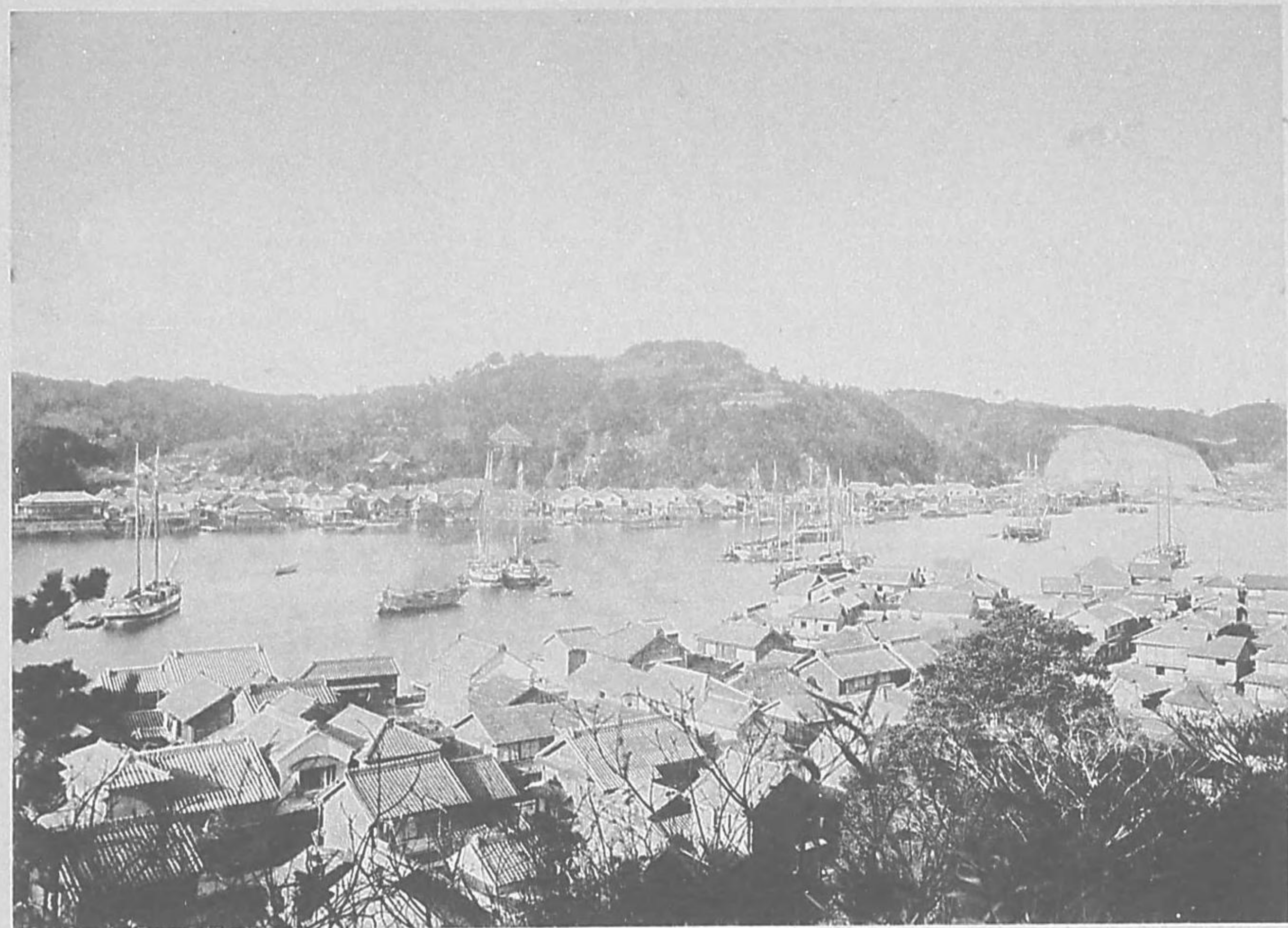


此邊を生きて出たる味は捕りし漁夫
よりも先に東京子の口に入るなるべ
し

三浦半島城が島



怪石獅象群り驚濤鰐鼉舞ふ、
長風北より至りて孤島南に
奔るに似たりとは是の
三浦郡の南端なる
城が島の實景、梅畷寫し
得て盡くせり



城ヶ島より三崎を眺望

をしまより

みさきにむかふ

釣舟に

積みあまれかし

けふの海さち



釣り糸は

そよこぼかりに

吹かせの

浪にさほらぬ

春のうなばら



三崎激浪

山のあらしは聲烈しく樹木動搖
のすさまじきばかりにて奇なら
ず浪の岩打つ
は響のみかは
雲を碎き雪を飛し白玉四散景狀
萬化す其觀また偉なり



三崎海岸

村姐和紅藏靴

漁翁體黑賽崑崙

松魚蔽海波光變

風母吹雲日色昏

(廣瀨旭莊雜詠中之妙聯)



三崎洞門

春は笑ひ秋は粧ふ山を手にし、夏
は涼しき海を掬ふも自在なれど



岩窓に障子も入れず

雪あらし



浦賀港

日本の本は

まだちやるめるも

吹かぬ間に

とけていんだる

あめりかの船



こは嘉永年間合衆國軍艦の此地を
去りし時に千種三位が戯れの詠な
り長崎を除きて泰西文物の最初に
輸入せし港なり



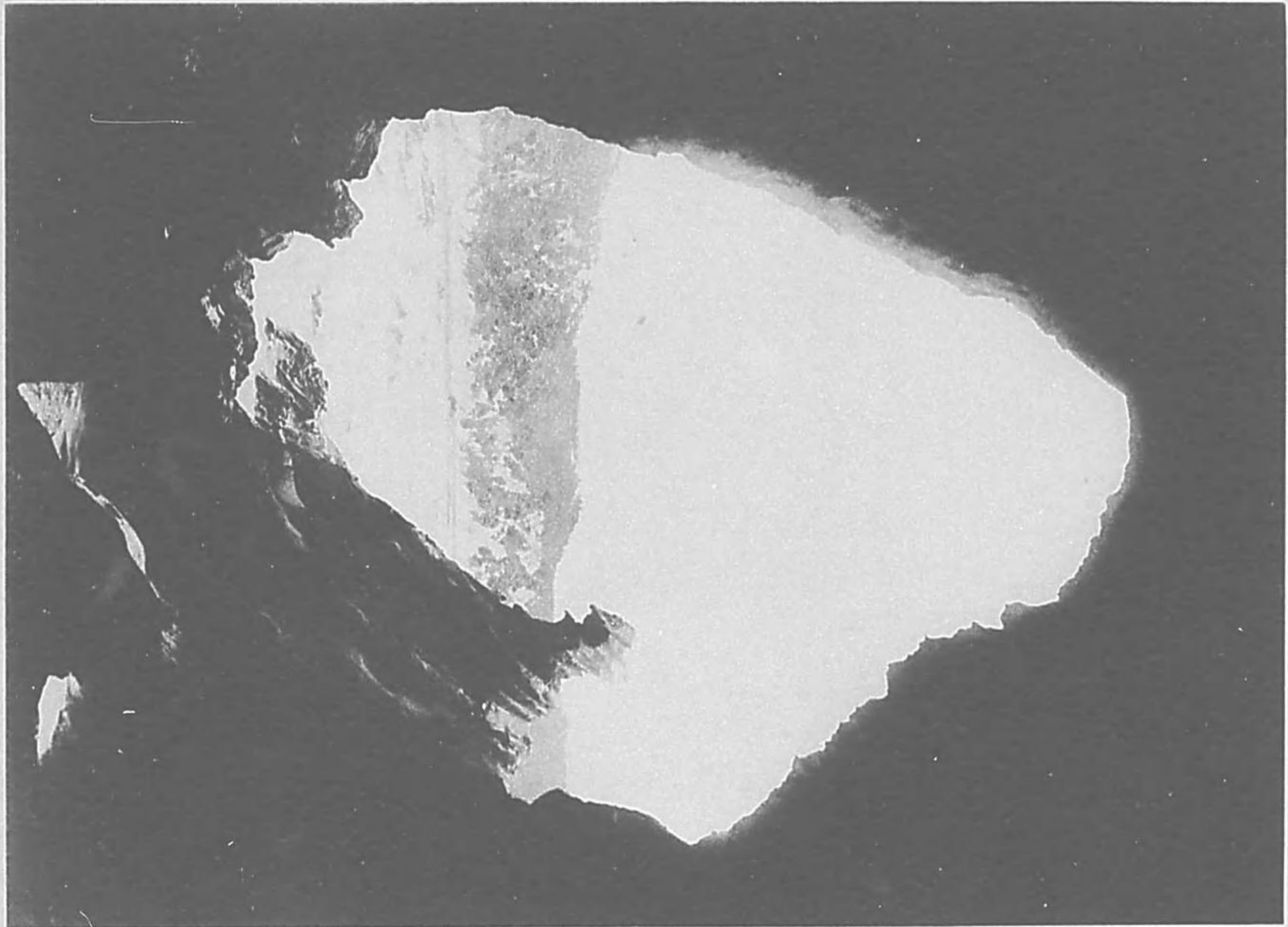
龍の口祖師堂

文永八年九月十二日、日蓮上人首の座
に直りしも法華經の功力によりて其
厄を免れし舊跡にて本堂の内陣に敷
皮石あり



願目を拍子に搦ん

御難辨



28/6/57

明治卅四年九月十日印刷

(旅の家土産第三十九號)

明治卅四年九月

刊日發行

(非賣品)

神戸市北長徳通五丁目四十六番地
光村利漢方齋留

發行兼印刷者 八木富次

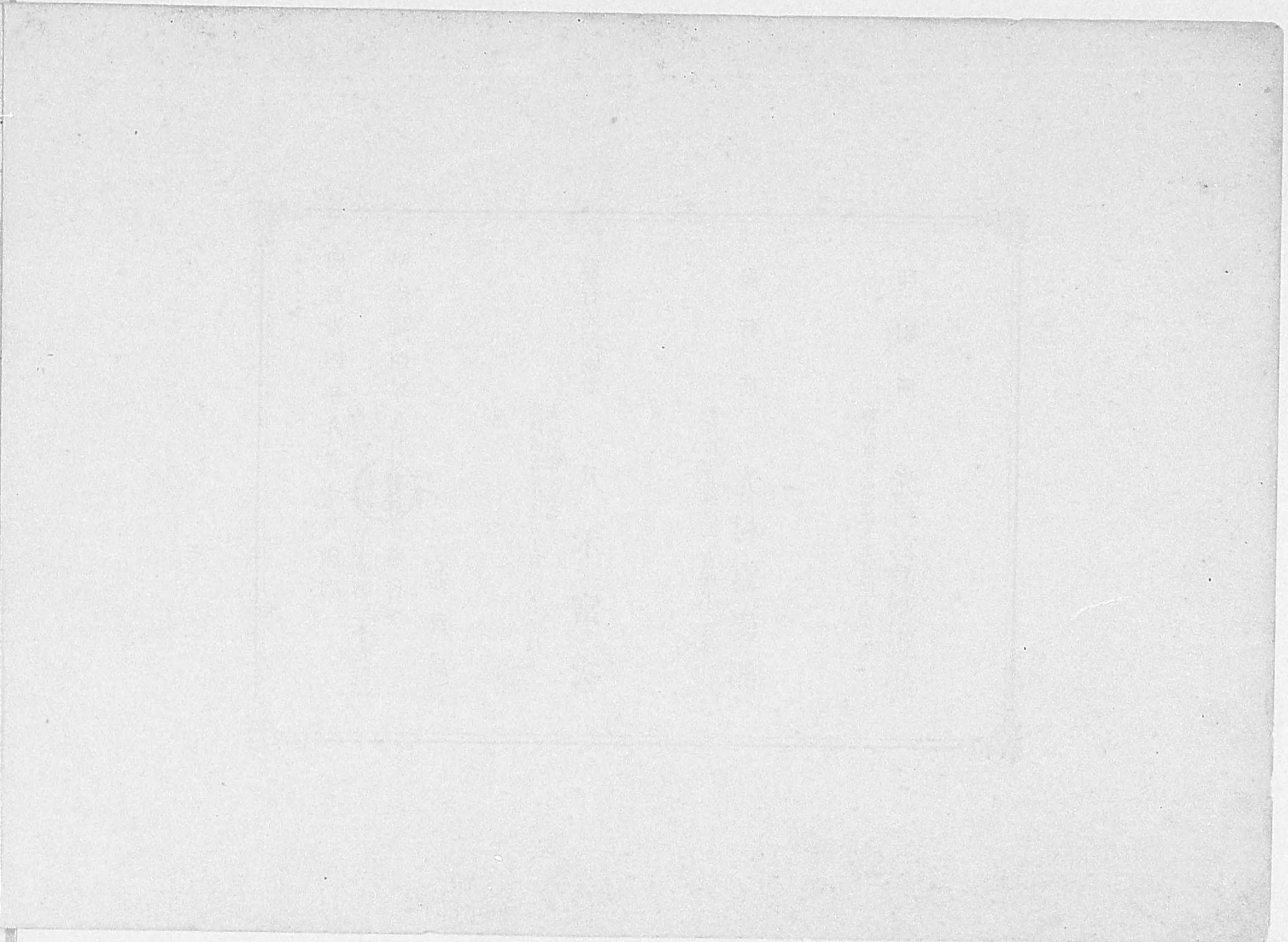
神戸市北長徳通五丁目四十六番地

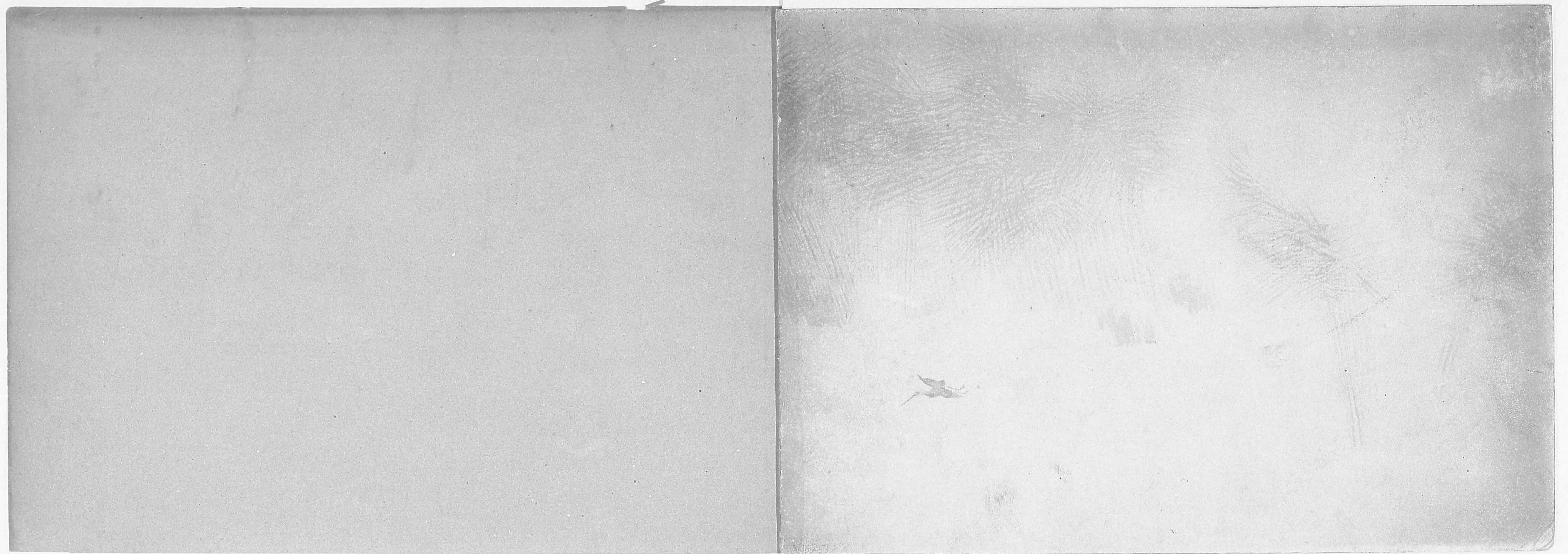
發行所 光村寫眞部

神戸市北長徳通五丁目四十六番地

印刷所 光村寫眞製版部

8
222





8
222

終